
OHMA - 逢魔 -

乃上スナイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

O H M A 逢魔

【Nコード】

N 9 8 7 2 X

【作者名】

乃上スナイ

【あらすじ】

圏点（傍点）及びルビを多用していますので、Internet Explorerでの閲覧をお勧めします。▼幼い頃の奇妙な体験以来、人とは違う特殊な能力に目覚めてしまった少年、柴田学は、或る日やって来た男の誘いで人里離れたと或る私立校へと転入することになるのだが、そこには学自身の未来にかかわる重大な秘密が隠されていた。▼第10回BOX－Air新人賞落選作。

第1話 「麗陵学園」

深い、深い、森の中を歩いている。

時折左右からしな垂れ掛かるように細い踏み分け道を塞ぐ、大人の身の丈程もありそうな雑草の束を掻い潜り、蜘蛛の網を顔に被っては剥ぎ取りながら、俺は目的の場所へと向けて一歩、また一歩と歩を進め、そして時折涙を拭う。

指の背でぞんざいに目の端に滲む滴を拭き払いながら、それでも重い足取りをひたすら前へと重ねて行く先は、赭い、薄暮の色に滲む深奥。

人の通わぬ禁足の地へと歩み行きながらしかし、俺の心は真逆の方角へと赴いていた。けれどももちろん逃走は敵わない。

何となればそれは彼らへの叛逆であり、謀叛であり、離反であり、自らの居場所を放擲することに他ならなかったからである。

故に進む。

奥処なきよう続く道をひたすらに、絶望の淵によもやの希望を探すかの如く――進む俺の目の前にまた一つ、深く首を垂れた雑草の束がしな垂れ掛かってきた。それを手の甲で押しやるように掻き分けて視界を拓いてやると、そこはもう目的の場所であった。

にわかに開けた空間が丸く、差し渡し十メートル程に周囲の木々を押し分けている。

まるで恐れ戦くように、遠巻きに賛美するかのように、一様に足並みを揃えて周囲に控えている木立の樹梢は、見上げればもちろん上方も同じく円形に開かれていて――赤錆色のどろりとした空が顔を覗かせていた。その直下に佇む一つの祠。それは果たして幾星霜雑草に埋もれながらもそこに佇み続けていたのだろうか。

雨露霜雪に幾度となく洗われ、そして燥き、どれ程の年月を風化

の危難に晒され続けたのだろうか。

恐らくは未だ幼いその時分の俺などには到底想像も付かぬような長さであったに違いない。けれどその簡素な石造りの古祠は、特段の瑕瑾を呈するでもなし、正に金甌無欠というより他ない姿でそこにあつた。

誰かが手を入れているわけでもないだろうに、罅割れたところもなく、欠けたところも見当たらない——その古来の遺物には、仏龕というのだろか、虚があつた。

角錐の屋根の下に前の開けた石室があり、そこには拳大の石が据えられている。

そのまるで人工的に研ぎ磨かれたかのような扁平率の限りなくゼ口に近い球体は、俺の住む小村の人々からは〈渴き石〉と呼ばれていた。そしてそれに触れる者は喉を掻き爪つたあげくに死んでしまふのだと——言い伝えられていたことを俺も、そして彼らも知っていたのである。

故に俺はにじり寄る足取りに慎重に歩みを進め、その忠節の試金石たる曰く物へと指を誘つていったのだけれど……でも、不意に竦む——手を止めたのは強烈な無意識の拒絶である。

何かがおかしい。

その物言わぬただの石くれはしかし、俺が今まで触れてきたいかなる物とも存在の根拠を異にしているように思えた。それはまるで意思ある何かに対しているかのよう。けれども無論それは人ではない。感情の揺らぎを宿す生命であるはずがない。けれども先程からまるで魅入られたかのように釘付けにされていた視線に、それは微かに応えたような気がして……、

さあ差し出せ。

手を指を——触れてそして禁忌を犯すのだと、そう唆されでもしたかのように、指は手は——再び自然に吸い込まれるようにその石の元へと誘われて……忌むべき呪物に触れたその瞬間、まるで蟻の大軍に襲い掛かられでもしたかのように。一瞬の内に漆黒の闇

が指の先から全身へと駆け巡って……目を開く。目蓋は光を網膜へと晒し、光は網膜に像として結ばれ、像はやがて現実の風景としての陰影を帯び始めて――ああと俺はそこでようやく悟っていた。またあの夢である。

頭を振りつつ認識の焦点を現実へと引き戻すと、シートあわいの間にずり落ち掛けていた体を揺すり上げて車窓そとを見る――そこは、眠りに落ちる前に見ていたものとさしたる違いのない景色――山深い幽邃の地である。思わずため息が漏れた。

流石に山の中へと分け入っているのだから一直線とはいかないのだろうけれど、それにしても遠い。俺は車内へと視線を戻すと、その些か時代を思わせる古風な内装つくりの路線バスに他の乗客の姿を探してみるのだが、悲しい哉、そこには最早俺以外の誰の姿も見つけることはできなかった。代わりのように、通路には花びらが一つ。それはあたかも不吉の予兆のように赤い花卉かべんを床へと落としていたのだけれど……何だろう。何か少しだけ妙な感覚に囚われる。が、それだけだ。疾駆する鉄の箱の中には最早俺の退屈を紛らわせてくれるようなものは何もなく、自然睡魔は再び首を擡げ始める。と、不意に下からの突き上げるような揺れ。道が悪いのだろう。時折アスファルトの亀裂に乗り上げでもするのか、バス全体が豪快に揺れていた。その一揺れがどうやら俺をあゝ悪夢から醒ましてくれたものらしいが、最早用済みである。速やかにやんでくれと願うも、結局それから更に十五分程の忍耐を俺は求め続けられることとなった。朝方電車で揺られ始めてからかれこれもう五時間近い。いい加減ゆっくりと体を休めたいところではあったのだが、目的の停留所へと降り立った俺はそんなささやかな願いさえも容易には叶わないということを知った。

溪谷沿いの道をバスが名残を惜しむ気配もなく行ってしまうと、辺りには微かな野鳥の声だけが響く――その秘境然とした風景を臨む山中やまなかの道上どうじょうからは、目的地はまだまだ影も形も見取することはできない……ばかりか、見上げるような勾配を無意味に誇る坂道が俺

を出迎えてくれていたのである。

嫌気が差さない方がどうかしている。

周囲を見回しても他にそれらしい道はないのでここが目的地への入り口に違いないのだから、一体何の嫌がらせなのだろうか。俺は肩から提げたボストンバッグを揺すり上げると、その外ポケットに乱雑に押し込んであった入学案内書を引き抜いて中身を見る。

確か付録に周辺地図が載っていたはずである。ぱらぱらとページを捲っていくと……あった。巻末の折り込みページにすでに何度か目を通して見慣れていた簡易地図。けれども当然のようにそこには俺の不吉な予想を裏付ける事実しか記されていなくて……深々とため息を吐く。俺はしかし気合いを入れるように再度バッグを勢いよく揺すり上げると、その正しく車返しと呼ぶに相応しい峻坂へと足を掛けていた。

——費用は全てこちらで……。

学費も、寮費さえもと言った——その男が俺の家を訪ねてきたのは、今からおよそ一ヶ月程前、未だ春の空気に時折冬の名残を覚えるような時節のことである。

学校から帰宅した俺を家の前で待ち構えていたその男は、未だ母親の帰らぬ我が家に強引に上がり込むと、リビングで二人きり、向かい合う俺へと向けてひどく胡散臭くて如何わしげな、けれども俺にしてみればそうである……言うまでもない自明な事柄を次々と尋ね掛けてきたのであった。

近辺で噂になっている小動物のミイラ死体は——そうだ。

中一の時にクラスメートの親が惨殺されたのは——そう。

一年前、クラスメートが自殺したのは——ああ。

父親が七年前に他界している——そうだ全部、この俺がやった。まるで現実感のないそれらの質問の数々に、どうして俺が馬鹿正直に答えようとしたのか……それは偏に予感があったからとしか言えない。

いつかはこういう日が来るのではないかと思っていたのである。

だから俺は男の申し出を二つ返事で受け入れると、物言いたげだった——けれども結局は何も言わずに押し黙ったままであった母を一人家に残し、こうして今その目的地への途上にいたのだが、それはどうやら終わりであるらしい。

長い長い坂道は、けれども長いだけで途中からただの虚仮威しに過ぎないということが分かってきていた。傾斜は次第に緩やかに、勾配は漸次に失われ、そこが山というより丘に近い地貌を持つ土地柄であるということに気づき始めた頃、聳え立つ巨大な門——それは決して誇張ではなく、正しくそのような形容が相応しい重厚さで行く手に待ち構えていた石造りの二つの門柱が見えてきて……思わず足を止める。俺は見上げる視線にその名前を認めた。

私立麗陵学園^{れいりょう}。

今から十年程前に設立された新設校だという——ここは、果たして俺という呪われた存在の墓場となってくれるだろうか。確かめるにはもちろんそうするより他ない。

俺はあたかも来る者を拒むかのように重苦しい雰囲気をもとわりつかせているその門へと向けて、再び足を踏み出していた。

「道中迷うことはありませんでしたか？」

「いえ」

予て指示されていた通りに職員棟と思しき建物のその最上階、理事長室とプレートに銘打たれた一室まで辿り着くと、そこには紳士然とした初老の男性が待ち構えていた。

「ずいぶん山奥ですからね。バスさえ降り間違えなければどうということはないのですけれど、前に一度バス停を乗り過ごしてしまったという生徒がいたものですから」

「はあ」気のない返事を返しながらも、それは確かに気の毒なことだと思った。確かさっきのあの路線バスは午前に一便、午後には二便の一日計三便しか運行されていなかったはずである。

「交通の便^{べん}はなに分わたくしどもの学校経営の理念というものに突

き合わせますに両立し兼ねるものでして」

「それは……分かります」

事前に受けた説明によればここには俺の他にも特殊な人間が何百人といるのだという。そのことから考えれば地理的条件による秘匿など序の口もいいところだろう。きっと他にもそれなりの工夫が施されているに違いない。

「どうそ、喉が渴いたでしょう」手ずから運んできたお茶を俺へと勧めつつ、彼は応接ソファの対面へと腰を下ろした。「それで早速これからのことについてなのですが、まずは寮ですね。ここへ来るまでの間に右手に大きな目の建物が見えたと思うのですが……」

「あの」

「何でしょう」折角ご丁寧に説明してくれているところ悪くはあるのだが、何だろうか。ちよつとした違和感を覚える。「失礼ですけど、理事長さん……ですよね？」

つい尋ねると破顔一笑。笑み溢れたその表情に俺はよもや謀られたかと早合点しそうになる……が、無論ただの早とちりであった。

「もちろん真正銘私はこの学園の理事長です。ご心配なく、あなたを騙そうというような人間はここには誰一人おりませんよ」

「あの……済みませんでした」羞恥に顔を俯かせながらおのれの非礼を詫びる。

「いえ、どうかお気になさらずに。不思議に思うのも無理はないでしょう。ここでは事務方の手が余り余っていないものでして、ほとんどは私一人です。やってみようというのが現状なのです」

「それは……」或いはと思い言い掛けると、言葉の先を取って彼が補足した。

「秘密の保持というものはお金を掛ければ右から左へというわけにはいかないのです。だから実際この運営に携わる殆どが君たちのような存在を意図せず知り得てしまった人間です。なので当然のことながら……と、失礼。これはあなたたちには余り関係のないことでしたね。話を戻しましょう」

どうやら言わずもがなの言葉で腰を折ってしまったらしい。俺はもうそれ以上は何も水を差すようなことは言わず、ただただ彼の言葉に耳を傾けることにした。

それからおよそ三十分弱。

寮生活における注意点やら今後の大まかなスケジュールを聞くに及び、どうやらここが或いはと考えていたような監獄染みた場所ではおよそなく、事実俺たちのような特殊な人間の為に用意された善意の場所であるということが分かってきて、何だかむしろ据わりの悪い心地を俺は覚えていたりした。

「以上で大体のところは終わりですね。何か質問は――」

「ありません」説明は至極丁寧で理解も容易かった。俺は即座に補足の不要を告げる。

「他に何か疑問に思うことがあったら遠慮なく周囲の者に聞くといいでしよう。皆きつと快く答えてくれると思います」

「はい」

「あとは寮への案内ですが、じきに案内役がやって来ると思うのでそれまで少し……」世間話でもと言おうとしたのだろうか、語を継ぎ掛けた口がしかし不意に止まる。

ドアが些か乱暴な調子にノックされたからだ。

「どうぞ」言葉を遮られたことに対する不満の色など微塵も見せずに言うと、彼の声に答えて扉が開く――と、その向こうから聞こえてきたのは何とも間の抜けた声であった。

「失礼しまーす」

語尾を無意味に延ばした断りの文句と共に入って来たのは、恐らくこの学校の生徒だろう。今はバッグの中にしまわれてはいるが、これからの新生活において俺が身に着けねばならない制服^{もの}と同じ制服をその身にまとっていた。

「編入生のお迎えに上がりましたけどー」

「ええ、ちよūdいいい時に来ました」言って俺の方へと視線を向け^{しばた}る。「では柴田君」

「はい」控え目なお辞儀で返してソファから立ち上がった。

「それではあとのことはお願いしますね」

「はい」

折り目正しい理事長の応対に比べ、何ともぞんざいな返事である。本当に分かっているのかどうか疑わしいくらいの軽率さで了承の辞を述べる声は男にしてはずいぶん高い。その代償のように背は俺よりも一回り小さかった。

「俺は片瀬晴臣、よろしく」

「柴田学」自己紹介のやり取りと共に差し伸べられた手を軽く掴んだのだが、嫌味のつもりか、その何倍もの力で握り返してきた。

「俺も二年だから、あとクラスも一緒な」

「ああ」けれども口調はごくごく友好的なそれである。面食らいつつもうなづく。

「それじゃあ理事長先生」

「ええ」よろしくお願いしますと重ねて言う彼に軽い調子で頭を下げて、きびすを返すと入り口の方へと足を向ける――やつに続いて俺もその場を辞そうとしたのだけれど、それはいきなりの異変である。

「柴田君――」

「はい？」

それまでの落ち着いた雰囲気からは想像もつかないような……どこかすがるような声に呼ばれ、俺は弾かれたように振り向いていたのだけれど、「いえ、すみません。何でもありません」

刹那の間を置き意味ありげに目を伏せる――彼の様子にこちらもう何を問うこともできなかった。

「柴田？」

「あ、ああ……」

一体何だったのだろう。遅れた俺を訝り戻ってきた片瀬^{やつ}に応じつつ、俺は再びきびすを返したのだけれど、その何か言いたげな、まるで懺悔するかのような深い暗愁に満ちた顔はどうしてか、そのあ

とずっと俺の心を無性にざわつかせ続けたのだった。

「それでさ、柴田は彼女とかいた？」

理事長室をあとにしてからというものの、無人の廊下を歩きつつこの片瀬とかいう新しいクラスメートは新聞種を漁るゴシップ記者宜しく根掘り葉掘り何でも聞いてきた。

「いない」 いるわけがないだろうと投げやりに答える。

「そっかそっか、いやーよかったよ。こんな僻地で遠距離恋愛とか正気の沙汰じゃないでしょ」

「外泊くらいはできるんじゃないのか？」

「できるよ？ でもGPSの追跡つき」

「は？」 さらりと妙なことを言われたので思わず聞き返す。

「だからさ、常に居場所を把握されつつ、定期連絡入れつつなので、大騒ぎで」

「何だ？ それ」

「……細い檻」 最早問い返すこともできなかった。俺は露骨に眉を顰めてやるのだが、こちらの様子など一向に頓着ないようである。

「目に見えないくらいの細い檻でさ。俺たちは檻の中に留め置かれる運命なのさ」

「意味が分からない」

「分かるようになるさ、すぐにな」

かもしれないと思った。けれどもそれとて俺の予想を越えてはくれないだろうとも。俺はすでに自分が籠の中の鳥となったことを自覚していた。「にしてもさー」

「何だ？」 いつ来るだろうかと待ち構えていたものがようやく来たらしい。好奇の視線を感じて鋭く迎え撃つ。「それって――」

「別に脱色してるわけじゃない。地毛だ」

「あ、やっぱ？」 指を指しつつ聞いてくるが、皆まで言わず撥ね返す。

「いや、俺結構ここ長くてさ。もしかしたら今流行ってんのかと思

った。それ」

たえ流行^{そう}だとしても世間一般の高校生がおいそれとしはしないだろう——それ程に、俺の髪の毛は見事なまでに真っ白だった。「染めたりとかしないのか？」

「どうして」その異様さに距離を置こうとしないばかりか興味津々という様子の変わり者に反問する。「目立つだろう？」

「目立つと何か不味いのか？」言って内心自嘲した。そりゃあ不味からう。俺のような人間はむしろ息を潜めて生きて行くくらいでなければならぬはずだ。しかし何も知らない一般人に無警戒に近づかれることもまた同様に避^さけてしかるべきことではある。それは俺と同じくここにいる以上いつも同じではあるはずなのだが……、
「いや、俺も目立てるのは吝かじゃないけどさ」確かに、どこまで同じなのかは確かめていなかった。

「お前……」よもやここまで来て壮大な引^{サブライズ}つ掛けを疑うわけではないが、俺と同じ境遇の人間がここには沢山集められているとして、可能性はもちろんあるわけだ。

「お前も、俺と同じなんだよな？」

「は？」

「だからお前にも俺みたいなの——」力があるのだとして、しかしそれは俺のものとは比べるべくもないような弱いものであり、俺が今まで経験して来た無数の苦痛など知る由もない……というような可能性もまたあり得るのではないだろうか。そう思い、それならばいっその場で確かめてみてはどうかと思ひ掛けた——その時である。
「どうした？」

不意にやつ足の足が止まったので問う——が無言。その目はこちらを見てはおらず、遙か廊下の先へと向けられていた。釣られたように視線を転じると、誰かが歩いて来るようである。「知り合いか？」

「どうだろ？ 違うんじゃないかな」

「何？」要領を得ないので振り向きつつ問うが、やつは何やら曰くありげな表情である。

「俺は知ってるけど、向こうがどうかは知らない……って話」

つまりは有名人——ということだろうか。再度振り返るとその彼女——制服らしいものを身に着けているのでここの生徒だろうと知れた——やや背の高い細身の少女は、きびきびとした動作でこちらへと近づいてくる——と、どこか感情を感じさせない凜いだ水な面のような表情で、そのまま俺たちの横を通り過ぎて行ってしまう。その様を、何とはなしに横目で追ってしまったのがいけなかったのだろう。「タイプか？」と、妙な疑いを掛けられる。

「別にそういうわけじゃ……」

「やめといった方がいいぜ？ 後悔すつから」

「だから——」

「死神」
しにがみ

「は？」 一体何の話だろうか。思わず呆氣に取られる俺にしかし向こうは構いつけることはない。「彼女の名前。その特別性の由来。彼女は学校じゃ名前では呼ばれないのさ」

何やらニヤリという擬態語がよく似合いそうな不敵な笑みを浮かべると、やつは片目を眇めてこちらの反応を窺うような表情をした。その挑発的な態度が或いは俺に妙な対抗心を芽生えさせたのかもしれない。こちらもちちらで不敵な笑みで応じつつ、俺は視線を遠ざかりゆくその背中へと投げた。「じゃあ俺と同じだな」

死神との蔑称が正確には何を意味しているかは分からないが、ちようどいい。先程の疑問の解消に一役買ってもらおうとしよう。

「もつともこつちは疫病神だったけど……」

揺れる緑の黒髪。腰丈程もあるその艶やかな長髪は規則正しく揺らめいて、あたかもこちらを眠りに誘う振り子のよう。けれどそうはならない。俺は意識を曖昧にさせるどころか逆に研ぎ澄ましてゆくと、彼女の頭の中へと不可視の触手を差し伸ばして……、「おい！」俺が一体何をしようとしているのかに気づいたのだろう。焦ったような声上がるがもう遅い。すでに掴んでいる。

俺は見えるはずのない彼女の頭蓋のその奥へと意識を集中し、そ

の感情を、心理を、記憶を——彼女という人間を形作る源泉を凝らし見ようと試みる。と、奔流するいくつものイメージの断片に意識が押し流されそうになる——その目紛しい世界の反転に思わず目をつぶり、ゆっくりと目蓋を持ち上げると、そこはもうすでに彼女の中であつた。

見渡す限りの一面の灰色の景色。灰色の空間。彩りは——彼女が忘れてしまったのか、或いは元からそういう記憶の仕方なのか、分らないがとにかくない。色という色が抜け落ちてしまっているその無彩色の世界の中で、子供が一人佇んでいるのが見えた。

どうやらここは住宅街の一面によくあるような児童公園であるらしい。見ればその一面に小ぢんまりとした砂場があつて、そこに小さな砂山のような……しかし何か別のもの。まるで何か統一的な形を持ったものを力任せに踏みつぶしたかのような砂の塊りがある。原形は——お定まりのお城か何かか、或いはもつと複雑なものであったかもしれない。とにかくただ砂を突き固めただけのものではないことは確かなように思えた。その残骸を、スコップを握り締めたまま呆然と眺めている少女。

人の古い記憶というのは大体がそうだ。視点の固定された現実然としたものではなしに、俯瞰のイメージによって形作られている。故にそれがこの記憶の主に相違ないと確信した瞬間である。

背筋を伝う、冷たい感触。

先程まで悄然たるその瞳を地に落としていたはずの少女が、いつの間にか……。こちらを見ていた。故に俺は弾かれたように後ろを振り向くのだが、当然そこには誰もいない。少女がその時見ていたであろう影はしかしどこにも見当たらず……。再び振り返った俺の視線の先で、少女は不意にこちらへと足を踏み出していた。その彼女から咄嗟に俺も一步を退いて……。逃げる、俺を追ってしかしまた一步、彼女も再び歩みを重ねていて……。なぜだろう。気づけば彼女は俺の足元にいた。そしてその世界にとってはただの視点。存在しないも同じであるはずの俺の体へと小さなその手を差し伸ばして

きて――、「柴田！」俺はすんでのところで現実へと引き戻されていた。

「な……何だ!？」

「何だじゃねーだろ！ 馬鹿野郎！」見ればいつの間にやら両肩へと手を掛けて俺へと怒鳴り散らしている――片瀬^{やっ}が？ もしかしたら俺を現実の世界へと引き戻したのだろうか。俺は一体何が起ったのか理解できずに再び彼女の元へと視線を走らせる――と、こちらを見すえる冷たい眼差し。もしかしたら俺は、覗き見ていたつもりで、実際には覗かれていたのだろうか。

余りのことに当惑する俺に、それは手酷い反撃である。不意に彼女のすぐ傍^{そば}の窓ガラスが揺れたと思いきや、それは次いでその隣――こちら側に近いそれへと伝播して、更にはそのまた次、次、次……と、次々に伝播して――全くの無意識にである。思わず目の前へと差し出してた俺の手のひらをすり抜けると、その疾風――最早ミクロな台風とさえ思われた――一陣の風は、俺の頬に小さな切り傷だけを残して綺麗さっぱりと消えていた。それで終わり。警告は終了。彼女は驚愕に見開かれた俺の瞳の中でゆるりときびすを返すと、颯爽と歩みを重ね、やがては曲がり角の向こうへと消えてしまう。

「お前な――」

そこでようやく全身の緊張を解いていたのは、どうやら俺だけではなかったらしい。やつが実に非難がましい声で抗議してくる。

「理事長先生に言われなかったか？ ここじゃそういうのはご法度だつてよ」

「聞いた」それはまず以て心に留^とめ置くべきことと前置きされてから確かに言われてはいた。「けど俺がここの生徒になるのは明日からだ」

それは全く以て詭弁もいいところの屁理屈だったのだが、やつは呆れたような顔をしつつもそれとは別のことを言った。「だからやめとけって言っただろーが」

「何なんだよ、彼女^{あれ}」

今や影も形もないその後ろ姿を思い起こしつつ言う——彼女は間違はなく俺の同類ではあろう。けれどもそれ以上の何かであることもまた確かなような気がした。

「だからさっき言っただろ？」

「何だよ」うわ言のように問い返す俺に、それは最早ただの冗談とは思えない名である。

「死神だよ……」

告げられた称号に、今度こそ俺は確かな畏怖を覚えていた。

案内された学生寮はあたかも中世の邸館ていかんを模したかのような外観に荘重な雰囲気醸し出していた。とてもじゃないが寄宿舎などという安手の言葉で呼び習わすことがためられるその善美を尽くした建築物は、中に入ると——もちろん全寮制であるから当然と言えば当然なのだが——その規模も相当なものであったのだが、入寮者の充足率は然程さほど高くはないようである。ちょっとしたホテル並みの広さの寮内を案内されて回る間、確かに行き過ぎる寮生と思しき生徒たちの数は屈指に余るものがありはしたのだが、しかし全室を満たしている程とは思えなかった。

「まあ、大体三分の一くらいかな」その辺りのところを興味本位に聞いてみると予想以上の答えが返って来る。「ぶっちゃけがらがら」
「ならどうして二人部屋なんだ？」

造りがそうだからといって無理にそれにこだわる必要はないだろう。そこまで部屋が余っているなら単人使用シングルユースでも何でも余裕を持って使えばいいのではないだろうか。

「その辺はほら、規律ある寮生活に資すると期待し……」

「隣組か」回りくどい建前の本音を率直に指摘してやると簡単に認めた。

「ま、有り体に言えばな。相手に自覚されつつ監視するってのは同時に監視されることでもあるってわけだ」

さっきから人の密度が場所によって区々な気がしていたのはどう

やら思い過ごしではなかったらしい。恐らく入室状況も一極集中的に纏め上げられているのだろう。

「それ程俺たちに妙な力を使って欲しくないってわけか」

「まあそれもあるけどな」

「も？」他にも何かあるのだろうか。疑問に思い問い返すも、やつは知らぬ顔だ。

「それよりほら、着いたぜ」居並ぶドアの前で立ち止まり、掲げられたプレート^{ルームナンバー}の辺りをこつこつと叩く。211と部屋番号の付されたそこがどうやら俺の新居であるらしい。

「俺の荷物はまだ運んでないから——」その時は手伝ってくれと決定事項のように言いつつ、扉を開けて部屋の中へと入って行く——やつに従い俺も入室する。

聞けば今までは他の部屋だったのが、俺のためにわざわざ部屋を移動して来てくれるらしい。ありがた過ぎて涙が出そうだった。

「そっちの荷物は？」広過ぎるとも狭過ぎるとも言えない部屋の真ん中で、無意味に腰に両手を当てて突っ立ちつつ、首だけを振り向けて聞いてくる。「業者に頼んだんだろ？　ならその時は俺も手伝うからさ」

「ああ、それなら大丈夫」

「は？」

「もう終わったからな」言いつつ肩の荷物を備え付けのベッドへと降ろす。

二人部屋と聞いていたので或いは二段ベッドかとも思っていたのだがどうやらそこまでの心配は無用だったらしい。部屋の両脇にはしっかりとした造りのベッドが二つ用意されていた。その奥側へと陣取りつつ言う。「俺はこっちでいいか？」

「ああ、別に構わないけど……ってお前」啞然とした表情で言う。

「荷物それだけか？」

旅行用のボストンバッグとは言えもちろんそこに個人の所有物が全て入るわけではない。けれど最早俺にとって財産と呼べるような

ものはこの体ぐらいのものだった。

「分かってんのか？　そう簡単には家にも帰れないんだぜ」

「家？」　そう言えば俺にもそんなものがあつたと思ひ出す。が、全うな家庭など知らぬ者にとっては雨露を凌ぐことのできる場所こそが家であつた。

「今日からここが俺の家だろ？」

「呆れたな、そこまで過去をばっさりってやつは俺は他に知らないぜ？」

「ここでは割と何でも揃うんだろ？　足りないものがあればその都度揃えるさ」

「使い古した思い出の品なんぞ新品に劣るってか」感心するよとさしてそんな風ではなく言う。「それより今日はこれで終わりか？」

「ああ、別に今日中に何かしなきゃならないことがあるわけじゃないけど」

「そうか」その言葉に疲れた体をベッドへと放り投げる。真新しいシーツの匂いは見知らぬ場所へとやって来た事実を改めて諭し掛けてくるようで、案外に心地がよかった。

「それじゃ俺は荷物の整理がまだだから向こうの部屋に戻るけど――」

「ああ」

「食事は今日は日曜だから――」

「五時から七時まで」

「風呂は――」

「八時から十時まで」

「えっと、じゃあ……」

「ああ」やり取りの途中からすでに目は閉じていた。妙な間を置いてからのため息を一つ吐くと、やつは部屋の外へと出て行く。それを音で確認すると、俺はそのまま底深い眠りの中へと深く分け入って行った。

自分が普通でなくなった日のことは今でもよく憶えている。

当時と或る事情で母方の祖父母の家へと預けられていた俺は、そのお世辞にも栄えているとは言い難い^{がた}寂れた村で、或る奇妙な体験をすることになる——切っ掛けは、当時俺が暮らしていた界限で幅を利かせていた中学生。言うところの餓鬼大将というやつである。その彼との確執にあった。

当時近所の小学生たちと一緒に日常的にその中学生のあとを付いて回っていた俺は、ふとしたことが切っ掛けでその彼の勘気を蒙ってしまう……結果、グループへの忠誠を示すためにと或る試練を課されることとなったのだが、それに利用されたのが村に代々伝わっていた〈渴き石〉と呼ばれる呪いの石の伝承であった。

その実に百年以上も昔に旅の禪僧が村の外れに置いて行ったのだという呪いの石は、当時の村を早魃から救うと共に、それ以後触れる者に渴きの呪いを与えるようになったのだと信じられていた。故に俺は自らの意志とは無関係にその呪いの石の元へと追いついて……結果、実に三日三晩の間である。原因不明の高熱に^{うな}魘されながら生死の境をさ迷うことになったのであった。

そしてそれ以後髪の毛は一本残らず見事な白髪となり、^か糅てて加えて何よりもそう……気づくと部屋はすでに大分暗くなってしまっていた。そのことに気づくと俺は横着にもベッドから立ち上がることもせず、仰向けに寝たまま、その場から一步も動かぬままにである。部屋の明かりをぼちり——点ける。こんな風なおよそ冗談みたいな力が備わってしまったのだった。

無人の室内を仰向けになったままで首だけを動かして眺める。

窓の外はもうすっかりと漆黒の帳に^{とぼり}閉ざされていた。無地の味気ない色合いのカーテンをこれまた手を使わずに引くと、俺はベッドの足元に転がっていたバッグを宙吊りに、浮遊させたままの状態で目の前へと持ってくると、中から真新しい制服を取り出す。そして部屋の鴨居へと掛けて、今度は私服数着を備え付けのクローゼットへ、次いで下着類をベッドの下に収納へと——これは実際目で確か

めることすらせずに手探りで放り込む。そして更には携帯と財布、入学案内書……と、これは一体いつ買ったのだろう。自分でも憶えのない文庫本を一冊。それぞれ適当に机の上に置く……と、確かにこれは呆れられても致し方のないレベルかもしれない。俺は自嘲の笑みを浮かべつつ、すつかりと空になってしまっていたバッグを用無しとばかりにその辺りに放り投げた――それら一連の行為全てが件の能力によるものである。いい加減習慣になってしまっているとは言え、もちろんやつにとっては些か好ましからざるそれは光景だったろう。

故に――、「おい」部屋の入り口の辺りから鋭い声が上がる。

「学校だけじゃねえって。寮も、ここの敷地内全部……っていうか外に出てもダメだ」

ベッドに寝そべったままの状態で横目に見やると、何やらいかにも怒っていますというポーズだ。胸の前で腕を組みつつ仁王立ちに立っている片瀬の姿が見えた。

「了解してるよ」

「してねえじゃねーか」全くと、少なからぬ憤慨を滲ませつつこちらへと歩いてくる。

「落ち落ち目も放せやしねー」

「大丈夫。次からはお前の目の届かないところでやるから」

「だから！」甲高い声で怒鳴り、続けて何かを言おうとするがやめたらしい。乱暴に頭を掻き毟ると悄然と肩を落とす。「まさかここまでの馬鹿だとは思ひもなかった」

「なんだよ」嘲る調子に言ってるが、もう先程のように感情を露わにはしない――代わりに、何やら携帯を取り出すとどこかへと電話を掛けるようである。

相手の応答を待ちつつ数秒、沈黙を挟んだかと思いきや、「あ……真嶋さん？ すみません突然」心底申し訳なさそうな調子に、けれどもどこか聞こえよがしという風である。用件を告げ始めた。

「いえ、俺のことじゃなくてですね。例の……ええ、転入生のこと

についてなんです、もし真嶋さんの都合がよろしければこれから……というのは無理でしょうか。ええ……はい。それはもちろん……大丈夫だと思います。はい、すみません」

そしてどうやら了承を取れたらしい、「それじゃあ後程」と、その場で頭でも下げそうな勢いで言いつつ通話を終える——と、「何だよ……一体」

俺は呆れたように問うのだが、やつの態度は打って変わって冷淡なものだった。

「いいからついて来い。お前に見せたいもの……いや、見せなきゃならないものがある」

一体どこに行くのかと尋ね掛けるも終始無言。仏頂面の片瀬^{やつ}に連れて来られたのは寮から校舎を隔てて更にその向こう——広大な敷地の後背部に当たるであろう位置に建てられた数棟の建物の中の一つ——どこことなく病院を思わせる雰囲気の施設内にある〈視聴覚室〉とプレートに掲げられた一室であった。

^{なか}内部を見る限りではちよつとした単館劇場^{ミニシアター}という感じである。そこへ足を踏み入れるなり俺に席に着くよう促すと、やつはすぐさま映写室と思しき隣室へと去って行く。そこでどうやら先程の電話の相手らしい——白衣姿の男とひと頻り話をして戻って来た。

「一体何なんだよ。まさかこれから男二人でレイトショー^{レイトショー}ってわけじゃないだろうな」

戯けた調子に言ってるが、向こうは取り合わない。

「そーいやお前、結局メシ食ってないんじゃないか？」

「ああ……そーいやそーうだな」言われて気づくが、まあ問題はないだろう。今すぐ倒れてしまいう程ではもちろんない。

それはてつきり単なる世間話かと思っていたのだが、何やらやつは一つ隔てた席へと腰を下ろしつつ、意味深な言葉を吐いていた。

「ちよつど良かったな」

「は？」聞き返すも無言。その内に場内は照明が徐々に落とされて

いつて——映写室の方で操作したのだろう——やがてすぐ傍そばにいるはずの片瀬やつの顔すら満足には見ることでできない闇の中へと沈み込む。仕方なしに視線を正面へと戻して頼杖を突くと、何やらスピーカーから声が聞こえてきた。

『それじゃあ始めさせてもらうけど……いいかな』

「はい、お願いします」どうやら映写室の彼であるらしい。こちらの声も拾えるような設計になっているのだろう。片瀬がその問いかけに答える。

『ではまず始めに簡単に自己紹介を……。僕は真嶋博次まじまひろつぐといいます。本来なら明日から……だったんだけど、でもこうなったらもう今日からということになるね。柴田君。君の担当になるここの研究員です』

研究員——という言葉に胸の奥底が冷たくなった。もちろん分かっていたつもりではあるが、俺たちはここでは厳然たるモルモットなのだと改めて突き付けられたようで、余りいい心地はしない。

『それで今から君には或る映像を見てもらうことになるんだけど……もし途中で体調が悪くなったり、或いはもう耐えられないと思ったりしたらいつでも言うってください。その時はレクチャーを中断して続きはまた後日、しかるべきカウンセリングを受けたのちに、ということになります』

何やら剣呑な感じのする単語が飛び出してくるが、然程身構えたりはしなかった。大方俺たちのこの力に起因する「ショックキングな映像」でも出てくるのだろう。それはしかし俺にとっては最早見慣れた現実である。

『それじゃあ始めます』

肩の力を抜いて目前のスクリーンへと視線を注ぐ俺の目の中に、まず飛び込んできたのはどこかの研究施設らしい場所の映像である。そこでは何やら薄青い検査衣のようなものに身を包んだ子供たちが大勢いて、どうやら彼らは俺たちの同類らしい。その秘められた能力の実演を要求されているようであった。

ガラス張りの箱の中に置かれた物体を浮かせてみたり、別々の個室に分けられた二人が全く同じマークの描かれたカードを目の前のテーブルの上から選んだり、まるで見世物である。その様子を満足気に眺めている研究者らしき大人たちの顔が偶に画面に映り込み、俺の不快感に更に拍車を掛けた。

『これは今から二十年程前に始められた我が国初の超能力研究のための継続的な取り組み——パラノーマリティ・コンファーム——超自然性証明計画と呼ばれるプログラムにおける映像です。一般に君たちのような既存の科学法則に反する能力を持つ人々のことを、超能力者、或いはサイキック、創作物などにおいてはエスパーなどとも呼びますが、私たちは通常パラノーマル、つまり普通の人々に対して〈para〉——「平行」な位置にいる人々であるという意味の呼称で呼んでいます。そしてそのパラノーマルたちの使う力を大まかにマクロPK、マイクロPKという二つの区分に別け、それぞれ別々のものとして扱います。PKというのはサイコキネシスの略で、マクロPKは巨視的な現象。つまりは目の前にある物体を手を使わずに動かしたりすること。マイクロPKは微視的な現象。例えば電子装置の挙動などに介入する能力のことを言い、特にマイクロPKは更にテレパシーと呼ばれる思考内容の直接伝達を可能にする能力の源泉であるとも見なされています。そして或いはその逆、サイコメトリー——他者の考えや物体に記録された人の思念を読み取ったりする能力や、RV、リモートビューイング、一般的には透視と言いますが、光学的な隔たりのある場所の様子を知覚したりする能力もまたこのマイクロPKを反響定位の要領で用いることによつて可能にしているものではないかと推測されています……と、ここまではまあ殊更何を覚えてもらう必要もないものではあるんですが、ここからが重要です。先程言った二つのサイコキネシスの内、マクロPKに関してはまあそれ程気にすることではないと思います。能力の持ち主が意識的に制御できる限りにおいては……ですが。それよりも問題なのはマイクロPK。能力の行為者自身にもその作用が

はつきりとは知覚し難いものの方です。そのことを説明するためにここで少し話題を変えることになりますが、どうか注意して聞いてください』

そこで目の前のスクリーンの映像が切り替わった。先程までとは打って変わって静的な映像は、何らかの図表であるらしい。まるで木の枝のような形だが、どこかで見覚えがある。確か系統樹というやつだ。

『我々人類の祖先は今からおよそ五〇〇万年程前にサルから分岐し、そこから猿人、更には種々のホモ属へと分かれ、最終的に今の私たち——ホモ・サピエンスへと至ったわけですが、なぜ種々の生物種の中で我々ヒトだけがこのように特異な進化、つまりは知性の発達——脳の巨大化を為し得たかについては未だ謎とされている部分が多いです。一説には言語の獲得が選択圧——適者生存を促す条件のことですね。それとして作用したなどとも言われていますが、我々は君たちパラノーマルから得た知見に則り、そこに一つの仮説を建てるに至りました。それがC S P K仮説です』

耳慣れない単語の紹介と共に、再び画面が切り替わった。どうやら世界地図のようである。日本を中心にすえたあのお馴染みの左右へ翼を開いたような図形が表示される。

『我々現生人類はその数の規模に反して遺伝的特徴が比較的均一であるということが一般にはよく知られていますが、それは今から七万五千年程前に起こったスマトラ島トバ火山の大噴火——通称ヘトバ事変』が原因であったと言われています。その未曾有の大災害の影響によって当時その総数を実に一万人程にまで減らしてしまった人類は、その後六万年にも及ぶ氷河期を乗り越えて、先行して世界へと拡大して行った他のホモ属たちに置き換わっていった……というのが今現在最も有力視されている我々現生人類の誕生の歴史なのですが、しかし私たちはそこに新たな可能性、つまりは人類の超能力——サイへの目覚めという重大事件を想定しています。その時代、自らの内に眠る超自然的な力に目覚めてしまった人々は、その世界

規模のカタストロフに際して偶々生き残ったのではなく、その特異な力を使うことによって生き残るべくして生き残ったのではないか……と、そう仮定するとその当時の人類の奇跡的なサバイバルにも或る程度の必然性が生まれてきますし、その後の人類の爆発的な進化の加速——俗に言う〈大躍進〉についても或る程度の説明の余地が生まれてきます』

やたらと壮大な物語だが、流石に希望的観測に過ぎるのではないのかと思われた。何せ客観的証拠の提示がない。素人目にもそれは些か眉を顰めざるを得ないような話だったのだが、何やら更に説明は続くらしい。今度はイラスト調の画である。一見グロテスクな感さえ受けるそれはどうやら何かの生き物の脳味噌のようで、二つ並んでいるのは比較を促すためだろう。

『我々ヒトの脳はチンパンジーのそれと比較するにおよそ三から四倍、とても大きく複雑ですが、実はその巨大な脳の成長は新生児段階においてかなり歪つに達成されるということが分かっています。簡単に言うとより高度な部分——言語や推論を司るような部分ですが、それがより低次の部分——五感などを司る部分より二倍程大きく成長するのです。そしてその過程はかつてヒトがサルとの決別を終えてからたどって来た脳の進化の変遷に酷似していると言われています。つまりヒトをヒトたらしめている最も重要な部分は、？生まれる前？ではなく、？生まれた後？に形成されるということです。これには今現在胎児段階での頭の大きさを小さく抑えることによって出産時の母体への負担を軽くするためであるとか、環境への適応度を高めるためであるとか様々な見解が提出されていますが、我々はこれをヒトが無意識に用いるマイクロPKの影響ではないか、と考えています』

そして再び画面は変わり、映像である。一番初めと同じような研究所染みた場所で、今度は子供ではなく大人たちが何やら実験を受けているようだった。

『現在我々は多くの実験結果から、君たちのような人間とは違う、

ごくごく普通の人々——普段の生活において何らパラノーマルな徴候を示すことのない人々でも、いくらかの微弱なマイクロPKを持つているということを確認しています。つまりパラノーマルとノーマルな人々の間には或る程度一般化して論じることのできる共通事項があるということです。その中の一つがCSMI PK、コンテニューアル・スポンテイニアス・マイクロ・サイコキネシス、継続性偶発性微視的念力による影響です。これを考慮した仮説が先程述べたCSPK仮説。我々人類は生後間もなく無意識下の微弱なサイの使用——つまりはマイクロPKによって、自ら成長する肉体——特に脳の発達をコントロールし始め、それによって他の生物種たちとは一線を画する高度な知性を、個体別に、個体発生ごとに獲得しているのではないかと……と、そのように私たちは考えています。これは或いはずいぶんと突拍子もない話のように聞こえるかもしれませんが、私たちは更にその先に人類の新たな進化の形をも確信しています。そのように私たちが信じる根拠をこれから君に示したいと思いますのですが……どうか心を落ち着けて、今はただ深く考え込まずに、見たもののありのままを心に留めるよう心懸けてもらいたいと思います。それでは……』

一拍……二拍、或いは三拍以上、長い間^まだった。横目で一つ離れた隣の席にいる片瀬を見やると、スクリーンからの光に照らされたその横顔が後ろ——映写室の方へと向いているのが見えた。そしてこくりとうなずく。それが合図であった。正面からの光の変化に視線を戻すとまたも無機質で温度を感じさせない病院染みた風景。

『これは一番初めてに見てもらったものと同じパラノーマリティ・コンファーム、今はすでに解散してありませんが、その試みの最後期に最も多く行われていた実験の一部です』

白い壁。白い机。カメラの正面——狭いとも広いとも分らない一室に、一人椅子に座らせられているのは未だあどけない顔をした少女である。年の頃は小学校高学年といったところだろうか。頭部には何やら脳波を測定するのに使われるらしい電極がいくつも取り

付けられていた。そしてその目前にはやはりガラスケースの中へと収められた雑多な品物の数々。それをきつと中で浮かせたりなどするのだろうと考えていたところで、それは実に手痛い裏切りであった。少女は中からフオークを選んで宙に浮かせる否や、ぐにやりぐにやりといとも簡単に折り畳み始める。

『予め言っておきますがこれは決して加工された映像ではありません。何ら機械的な修整の施されていない生の映像であり、真実の記録です。そのことをどうかよく憶えておいて下さい』

何とも勿体振った言い方であるが、俺にだってこれくらいのこと是可以る。先程は少女のどちらかと言えば華奢な体つきとのギャップに面食らってしまったに過ぎない。

「もういいだろ？ 何なんだよ一体。こんなもん俺に見せて何を期待してるってんだ」

「いいから黙って見てろ」

流石に焦れて問うのだが鰐膠にべもなかった——やつの言葉にため息を吐きつつ、仕方ない。もう少しの我慢だろうと従ってやるのだが、言った当人の方が黙っていなかった。

「お前は本当に何も疑問には思わなかったのか？」

「何？」どこかこちらを見下すような調子である。思わずカチンときて横目で睨み据えてやるのだが、向こうはこちらなど一瞥だにしない。

「どうして俺たちのような人間がこんな風な人里離れた場所に集められているのか……。そうしなければならぬのか……」

「それはだから困るからだろう？ 俺たちみたいな人間が普通の社会に紛れ込んでたら」

最早こちらも相手のことなど見ずに、一心不乱に実験に勤しんでいる少女の姿だけを捉えて言う——と、「確かにな」思わずという風にやつは嗤わらった。

「そりゃそうだろうさ。俺たちみたいなのが外にいたら大問題だ。でもだとしたらどうしてここには高等部までしかない？ 高校を卒

業したらその先俺たちはどうするんだ」

「それは――」確かにそうだった。改めて言われると咄嗟には答えが思い浮かばない。言い淀む俺にやつは淡々とした口調で告げた。

「ここ……今俺たちがいるこの場所は、元々は大学の校舎として使われる予定だったはずの場所だ」

けれど言葉は頭を素通りし、意識は無闇に弄ばれる。俺はやつの言うことなど最早聞く耳など持てず、ただただ目の前の映像に目を奪われる。

「初めの内はそこまで考えられてたんだよ。ここの敷地内から一歩も外に出られなくなったら本人がそう望みさえすれば、高等教育の段階までサポートしてくれる態勢を理事長先生は整えてくれてたんだ。けど……」

少女の首が、妙な方向に傾いていた。それはまるで大きなこぶでもできたかのようである。奇妙に首を傾げ、だらりと締まりなく開いた口からは涎を滴らせていて……でも本当に、少女の首からは大きなこぶが隆起していて……今やバランスを取るかのように反対側からでもある。同じように盛り上がりつつあったそれは、しかし華奢な少女の体にはおよそ不釣り合いな、隆々たる筋肉の塊り。

「今からもう何年も前の話だ。俺がここへやって来た当時の高等部三年の生徒数はだいたい六十人前後。けど卒業式にはその半分もいなかった。それから更に半年程して、大学に上がったはずの卒業生たちは一人残らずここから姿を消していた」

そこには最早先程までの可憐な少女などどこにもいなかった。代わりにいるのは腕も――そして机の下に隠されてはいるものの脚もまたそうだったに違いない。およそ人の身にはあり得るはずのない太さへと変じ、その皮膚を赤く、膨れ上がる筋肉によって張り裂けさせて、正に悪鬼の如くに鮮血に染めている――異形のバケモノの姿である。

既にどこをどう見ても人のそれとは見えない顔貌は、いつの間だろう。牙を剥いていた。そして目尻は鋭く裂けて、目が二つ。も

ちろん片側^{ひとへ}だけでである。だから都合四つ——具^{そな}えられた瞳が人体の構造上あり得るはずのない、手ん手に左右の連動を無視した動きで機敏に周囲を観察し、やがてカメラ^{こちから}を見る——や否や、恐らくはサイコキネシスである。レンズに瞬間的に亀裂が走り、そして暗転。ブラックアウトするスクリーンの光景に俺は最早すっかりと意識を飲み込まれてしまっていた。

「元々がおかしな話だったんだよ。俺たちは……はなから普通じゃなかった。だからその行き着く果てが常識の範疇^{はんしゅう}になかったとしても、それは何ら驚くべきことじゃない。むしろ妥当であるときさえ言える。その化け物染^{ちから}みた能力に相応しい姿になって……精神^{こころ}まで化け物^{そつ}になってさ……俺たちは、初めからここで終わる運命だったんだよ」

まるでその死の運命を決定づけられた者に対して言うかのようにであるが、しかし……、「なんの冗談だよ、これ」

よもやそれを手もなく受け入れてやれるような余裕はない。俺は笑ったつもりだった。なのに声は殆ど泣いてでもいるかのような情けない音色を上げていて……質問に答えたのはやつではない、スピーカーの向こうの彼である。

『残念ながらこれは君を歓迎するために用意した些^ちかた^ちの悪い余興でもなんでもありません。今はもちろんこのような非人道的な実験は一切行われていませんが、しかし事実です。君たちパラノーマルは通常の人間よりも強いPKを持つが故に、その肉体に受ける影響もまた通常の人間よりも過大なものとなってしまう……結果、遺伝子レベルでは何ら異常がないにもかかわらず、その姿をヒトとは全く違うものへと変じてしまう可能性を持ち合わせています。これを我々はOHM、オーバーヒューマニティック・メタモルフオシスと呼んで、人類の最終的な進化の形態^{かたち}に位置づけています』

最早何を言う気力もなく、ただただ呆然と言葉を失うより他ない——俺に、最後の駄目押しとばかりにやつが言った。

「諦めろ——」

すでに場面は先程の決定的瞬間へと巻き戻されてしまっている――スクリーンの前へと進み出で、やつがその悲愴の運命を背に神妙な面持ちに告げる。

「何をどう否定しようが真実は変わらない。見ろ。これが……この現実が俺たちの未来だ」

運命^{それ}がしかし本当のことだと知れたのは、それから少しだけあとになってからのことである。

第2話 「ヒトの咲く風景」

気づけば猫は干乾びた死骸になっていた。

夕映えに染まり渡る公園。その片隅に一人佇んでいた俺は、足元に転がるそのまるでミイラのように萎びた猫の屍体をじっと見つめていた。

辺りに人影はなく、声すらもしない——まるで俺一人を残してみんなどこかへ消え失せてしまったかのような世界の中で、けれども誰か——神様のような超越的な存在かもしれない。この世の全てを見通すような力を持った何者かに俺はひたと見すえられているような気がして……足が竦んで動けなかった。だってまさかこんなことになるだなんて思ってもみなかったのだ。

なのにそれはいつもの帰り道。例によって空腹に意識を朦朧とさせながらもその公園の傍を通り掛かっていた俺は、生け垣の中から飛び出してきた小さな野良猫の姿に思わず目を奪われてしまっていた……意識は霞み、理性は野性に飲み込まれ、気づけば逃げ惑うその後ろ姿を獣のように追ってしまっていた——その後、俺は一体何をしてしまったのだろう。上手く思い出せぬままにも改めて自らの手のひらをひたと見つめてみると、そこにはべとりと気持ちの悪い感触のする薄汚れた体毛がいくつもいくつも絡み付いて……俺はそう、その日始めて自らを忌まわしい存在。忌避すべき異質。醜悪な内実を抱えた言うなればそう——へバケモノ、正にそうしか言いようのないものだ と確信したのである。

「起きたか」

寝覚めは最悪だった……ばかりか、そこには望まぬ追い討ちまでもが待ち構えていて……、「しばらくは向こうじゃなかったのか？」俺はベッドから体を起こすなり不機嫌な調子に問い掛ける。

「別にまだ荷物は全部運び込んだじゃない。ただ少々予定が狂ったんでな。仕方なくだ」

「何が仕方なくだ」吐き捨てるように言って足をベッドの下へと下ろす。

「お前が勝手に予定を変えただけだろうが」

昨夜ゆうべ見せられたあの映像は本来ならば今日この日、登校初日のプログラムとして見せられるはずのものだったのだという。それをこいつ、片瀬晴臣が独断で一日前倒ししたのだった。俺はその仕打ちに対する意趣返しとばかりに食って掛かってやる。

「それよりも登校時間はとくに過ぎてるんじゃないのか？ どうしてお前はまだこんなところにいる」

「だったら焦るのはむしろお前の方だろ？ 転校初日から遅刻なんかしてなんの得があるってんだ」

確かにそれには一理あった……が、最早俺を取り巻く状況はそんなお気楽なものではないのだ。いかにも当り障りのないといったような世間話に俺は下らないと顔を背けてやる——と、急に声のトーンが落ちた。

「お前が望むなら……」

「何？」

「お前がもし本当にそれを望むというのなら……だ」

それまで俺と同じように自分のベッドの縁へりに腰を下ろして、どこかわざとらしいまでの砕けた調子に話をしていたやつが、すっとその場に立ち上がる——その服装は、すでに制服のそれである。

「今までも数は少ないけど何人かはいた。だから——」

「何の話だよ」

奥歯に物の挟まったような言い方に焦れて問うと、何やら意を決したかのような顔つきである。やつは至って真面目な調子に答えた。

「安楽死——という選択肢もある」

けれど当然だ。言葉は頭に拒絶され、理性が激情に押し流される。俺は弾かれたようにその場に立ち上がると、この世の理不尽そのも

のに対するかのように傲然と言いつつ放っていた。「ここまで来て――！ それでいきなり死ねてのかわい！」

「そうは言っていない！ ただそういうやり方もあるって話だ。最後の最後にすぎるものがあればいくら気分も落ち着くだろう？」

「そんなもん聞かせられて今の俺にどうしろってんだ！」

ただもうぐしゃぐしゃにこんがらかった頭の中をどうにかしたいのである。今はもう、自分の感情を整理するので手一杯だった。「ついて行けねえよ……実際」

「ならカウンセリングを受けろ。それから冷静になって――」

「それで？」 冗談じゃないと鼻で笑ってやる。「冷静になればあれを受け入れられるってのか？ お前は」馬鹿げた話だ。むしろ信じられなくなるに決まってる。

「気持ちの問題でどうにかなるもんじゃねえだろ……あんなもん」

それはおよそ世間の常識とは懸け離れた話であり、当然おいそれと受け入れられるべくもないものである。けれども脳裏に蘇る昨夜のあの映像。それは或いは俺たちが元から抱えている〈非日常〉とは極めて親和性の高い事実でもあって……不意に笑いが込み上げてきた。半笑いに鼻を鳴らしつつ言う。

「体の体積が増えたんだぞ？ どんなできの悪いSFだよ」

「だとしてもそれが現実だ」

「ふざけるな」一転顔から一切の表情を消し去り言うが、沈黙はそう長くは続かなかった。「E＝MC²乗」

「は？」 まるで聞き分けのない子供を諭し付けるかのような表情である。哀れみに満ちた顔つきでやつは言った。

「アインシュタインだよ。特殊相対性理論。質量とエネルギーは等価だっていう話」

しかし子供騙しもいいところである。

「そりゃあれだろ。原爆とか……物質の消滅によって莫大なエネルギーが取り出されるっていう。それを逆説的に考えれば確かにエネルギーから質量を取り出すなんていう芸当も不可能じゃないのかも

しれない。けどそんなことを本当にしようとしたらそれこそ原爆並のエネルギーが必要になるはずだろ？ それにそもそもそのために使うエネルギーが一体どこから湧いて出てくるってんだ」

余りに荒唐無稽な話である。俺は思わず鼻で笑ってしまっていたのだが、しかし変わらない——やつとその真剣な眼差しに見すえられ、俺はつい反射的に自分の発言を顧みてしまう——それが敗因。気づかずにいれば良かったはずのものをたぐり寄せる魔の誘惑。「ああ……そうか、そういうことか」

得体の知れない、その出所さえ定かには分からないエネルギー——力を、俺はもちろん目の前のこいつだってそうだ。それこそついうっかりと見過ごしてしまいそうになる程身近に日々感じているではないか。

脳裏に導き出された解答をやつが代わって口にする。

「もちろん俺たちがどこから引き出してくるそのエネルギー——サイの発現に伴う未知の力というものは実際それ程大した力じゃない。精々が人一人分の仕事を肩代わりできる程度のもんだ。けど有るか無いかの差は大きい。少なくとも程度問題を論じられる段階なら、それは最早『科学』だ」

だがやはり首肯はでき兼ねた。俺は首を横に振りつつ目を伏せる。「よくできた話だ。いや……でき過ぎだ」だからそう……、「俺は信じてない」

「お前だって見ただろ？ 昨日のあれを」

「あんなもんいくらでもでっち上げられるだろうが」

「あれが作り物だったのか？」

「そうだ」

「だとしたらそれは何のために」

「何？」

「だから理由は何だって話だ。あんなものをわざわざ作らなきゃならない理由が一体どこに——」

「だから！」我知らず声が跳ね上がる。「使わせたくないんだろ！

？ 俺たちのこれ！」

その瞬間、視界の隅に転がっていた鞆があたかも見えない指先に摘ままれてもしたかのようである。不意に重力の頸木を逃れ、宙へと浮いた——と思いきや、それだけではない。机の上に散らかしたままだった携帯やら入学案内書やらも何もかもがそうである。不意に不動の重心を失ったように宙をさ迷い始める……が、「やめろ！」怒号は甲高くはあっても決して迫力に乏しいものではなかった。

「聞いただろ！ 俺たちの力が元凶なんだよ！」

「どうしてそう言い切れる！？ 真面に調べることもできないんだろ？ なら——」

「いい加減にしろ！！」

最早さながら無重力状態である。浮遊する物体は手頃な重さの小物ばかりに留まらず、遥かに重量の勝るであろうベッドや机や剩え人の——片瀬の体さえもがそうだった。今や寄る辺なき宙へと吊り上げられてしまっていたのだが……、「何……だ？」

不意に翳された腕が——やつの右手が、何か湧き上がって来るものを押さえ付けるかのようなジェスチャーで下へと降ろされる……と、一体何が起こったのだろう。机が、ベッドが、そしてやつの体までもが全で一転、常識の原理原則に不意に立ち返ったかのように床へと無事の帰還を果たしてしまっていた。

「お前……一体何をした？」

「何も」言うがしかしそんなはずがない。「嘘を吐くな」鋭い視線に射抜いてやると、わざとらしく視線を宙へと逸らして肩を竦めた。「別に大したことじゃない。俺もお前のせいで禁忌を犯しちゃったっただけのことだ」

事もなげに言うが、だとすればである。

「まさかお前……」俺よりも強力なのだろうか。力が——と、微かな畏怖に身を硬くした瞬間である。早合点するなとやつは語を次いだ。

「俺の力はちょっと特殊でな。他人の力を抑える方向には何倍も強

く働くんだ。別にお前よりも強い力を持ってるってわけじゃない」なるほど――、「それでか」だから抜擢されたわけだ。お目付け役に。問題を引き起こしかねない新参者の……俺はといえば、最早どうにも氣勢を殺がれてしまって、何だかひどく場違いなところでやけになっていたような気すらしてきた。

虚脱したように再びベッドへと腰を下ろし、投げやりな調子に呟く。「分かったよ」

大きく息を吸い込んで深呼吸。しかし吐き出す頃にはため息となっていた。

「もう何も聞かない。力も使わない。だから……」頼むと、それは心の底からの願いだった。「一人にしてくれ……」

多分やつにとっても俺のその言葉は予想通りのものだったに違いない。だから部屋に居残りつつも制服姿で待ち構えていたのだ。「分かった」短く応えようと傍らに置いてあった鞆を取り上げすなりと立ち上がる。

「もし何かあったら携帯に連絡してきてくれて構わない。そこに番号は書いておいた」

「ああ」視線で促されて机の上を一応確認する。

「それじゃあ」

「ああ……」頷くように、或いはただただ項垂れるように、深く首を垂れるとその音の確認だけで片瀬の去り際を見送った。

それからふと視線を上げ、窓の外を見る……と、そこにはまるで人の苦悩などお構いなしに晴れ渡る、どこか傲慢な意志すら感じられる大空がどこまでも青く、曇りなく広がっていた。

人間的意識は疎か、五感すらもかつてのそれとは別物になってしまっている可能性が高いという。

あの醜惡なバケモノ――OHMとかいう姿に成り果てた俺たちのことである。

その意思はおよそ人の言葉を解することがなく、性情凶暴にして

宛ら猛獣の如くであり、実際に襲うのだという。人間を——かつての同胞を。

俺はそこに一縷の希望を探すかのように遥かな翠蓋を仰ぎ見る。
細い檻——。

いつぞややつが言っていたその言葉の意味が今なら何となく分かる気がする。恐らく俺たちをこの場所に縛っているのは、現実的な檻ではなく、塀ではなく、宛て行われた規則ですらない——各々の胸に宿る恐怖なのではないだろうか。

見上げる葉叢の向こうに透く太陽は、もうすでにかなり高い位置にあった。

あの後、結局昨日の昼から何も食べていないことに気づいた俺は、最早人気のすっかりと絶えてしまっていた寮の中を延々放浪した挙げ句、そこでは空腹を満たす術がないことを悟ると、何かしらの食料を求めてこうして寮の外まで出てきてしまっていたのだが……、ここは一体どこなのだろう。

道は行けども行けども半ば獣道のようなひどい砂利道である。外へと出てきてからこの方、歩みをふらふらと考えなしに連ねてきてしまったのが災いしたのだろうか、何とはなし、今更きびすを返す気にもなれずにいた——そんな折、ふと足が止まり、それを契機に頭の中も空っぽになってしまって……つい要らぬことを考えてしまっていた。それが失策である。

急にばかりと意識が宙に浮いてしまい、空転する思考が現在の軌道を外れて遠い過去へと放り出される——刹那、脳裏を過るのはやはりあの光景である。

夕暮れの公園に佇む俺と、見下ろす地面に転がる野良猫の姿。

俺は咄嗟に首を振りつつそのイメージを心の中から振り払おうとするも、時既に遅し。

それはあの日感じたものと同じ口渴感である。喉は今しも罅割れんばかりに餓え始め、涸れ田の如くに潤いに焦がれ始める。俺は我知らず歩みを再開させると、やがて小走りに、果ては疾駆のそれへ

と歩度を切り替えて……ひりつく喉に指を這わせる。その奥の食道を直接に掻き篁^{サイ}りたい欲求にどうにか抗おうとしていた。

力は――PKは、無意識の裡^{うち}に使われてはいないだろうか。或いはあの余りにも救いのない結末は既に俺のすぐ傍^{そば}にまで忍び寄ってはいないだろうか。そんな疑念はしかし実際には深く考えている余裕はなかった。

俺は周囲に誰も居ないことをいいことに、最早全速力で大地を駆け始める。

砂利道を逸^それ、獣さえ通わぬだろう道なき道をひた走り、踏み締めるべきその大地さえも焦れたいと蹴りやると、体を上空^{そら}へ――。

木々の梢^{そつが}を足下に踏み締めあたかも飛鳥の如くに樹冠を渡る――俺はそう、既に世に非^{あら}ざる不可視の力――サイを以てその筋力の限界を軽々と底上げしてしまっていた。故におよそ体は常人には不可能であろう動きを易々^{やすやす}と熟し、素早く巡らす視線は周囲に犇めく樹木の陰に獲物を探す。その視界の端に――もちろん野生のものだろう。木々の新緑と腐葉土の黒褐色に紛れて跳ねる茶色の影を俺は認めて――あの日、あの時、意図せずにもしたように、俺は理性ある「人間的意識」というものをことごとく放擲^{ほうてき}してしまっていたのだった。

一面散り敷く濃紅^{あか}の群れ。その合間を縫うようにして立ち並ぶ石造りの置き物たち。

それが閑雅な植栽庭園などではおよそなく、ただの墓地であるということに気づいたのは、その抗い難^{がた}い喉の渴きをさんざに癒やし尽くした後^{あと}でのことだった。

気づくと俺はその花の墓園に倒れ伏していて、傍らにはやはりそう、予想通りのもの。時既にあたかも幾星霜を閲^{けみ}したかのような干乾びた野ウサギの死体が無残に朽ち果てていた。けれども未だ不明瞭な意識を押してふらふらとその場に立ち上がった俺は、事態はそれだけではないことを悟る。

見れば墓中に伸びる小道を覆い隠さんばかりに密生しているその花は——余り詳しくはないので断言はできないのだが、恐らくはカーネーションだろう。濃紅のうこうの花弁かべんを以て墓地特有の心寂しさを慰めるようであったのだが、その大部分がそうである。つい先程までは天々ようようと咲き誇っていたに違いないその花弁はなを、しかし今や見る影もなく哀れに散らしてしまっていて——茎さえもが悄然と地を指してしまっているのである。

その惨状はもちろん元からそうであった可能性もゼロではないのだろうが、大方がそう、この俺の異常な体質がしでかしてしまったことと見るのが妥当だった。

俺は自らの手のひらをまじまじと見つめ、そこに宿るであろう狂気の力を思い見る——と、何やら妙な笑いが込み上げてきた。

堪らず視線を上げ、くつくつと噛み殺すようにしばらく喉を鳴らしていたのだけれど、目の前に広がる無辺際むへんがいの青——余りにも人の世の苦しみからは遠いように思える直青ひたあおの絨毯は、まるでこちらの心の奥底を見透かしてくる冷徹な眼差しのように見えて……こぼれ出る笑いは最早ただの無様な吐息の連なりでしかなかった。

故にやがては絶え、静寂へと帰る——沈黙に身を浸しながら俺は、その清澄さばかりを無闇に誇る蒼空を真っ直ぐに見つめ返していたのだけれど……まるでそれを待ち構えてでもいたかのである。

「お前にも——」

耳に心地良い。どこか懐かしい感じのする声が響いてくる——と、思うもつかの間、一瞬遅れて意識が警戒のそれへと切り替わる。弾かれたように俺はその声の主を振り返るのだが、そこにいたのはおよそ予想だにしていなかった人物であった。

「お前にも、妙な力があるのだな」

思わず息を呑み込む俺の視線の先で、どこか捉え所のない雰囲気醸し出しつつこちらへとやってくるのは、昨日俺がここへと来た早々に廊下ですれ違っている——あの〈死神〉の彼女である。

「いや……これは」しばし呆氣に取られるも、今の自分を取り巻く

状況を思い出す。咄嗟に取り繕おうとしたのだが、彼女はまるでこちらに構う様子がない。

「お前は？木？なのだ」

「は？」素で調子外れの声が漏れた。しかし彼女はなおもそのおよそ意味の取れない言葉を紡ぎ続ける。

「樹木や草花といったものはみな等しく地中より引き上げた養分によって生かされている。反して土壌は彼らの動脈だ。絶えず命の源を注ぎ込み、望むと望まざるとにかかわらずそれらを咲かせ、花開かせる。それはちょうどこんな風に――」

言うや否や彼女は膝を屈め、まるで居並ぶ墓石を王侯貴族にでも見立てたかのようなだった。深々と首を下げたかと思いきや、手のひらを裸の土へと伸ばす――と、それはその口からこぼれた言葉よりも更に不可解な、およそ理外の現象であった。

思わず驚愕の声を上げる俺の目の前で、あたかも時の流れを遡るかのよう。花が――濃赤の花弁が、今や枯れ果て再び咲くことはないだろうと思われたカーネーションの花たちが、しかし枯死の淵より引き上げられ、萎びた花冠は元よりそうであったとばかりに瑞々しく生気を孕み、項垂れ地面を指していたはずの茎も、最早老者のそれをではなく、意気軒昂たる若者の背筋を思わせる壮健さで直立していたのである。

けれどもまさかそんなことが本当に起こり得るわけではない。

「あんた……一体何者だ？」

ようやく我に返った俺は、惚けた表情を引き締め直すと透かさず彼女に問うのだが、しかし――分かっていて。

今彼女のしたことは、そのものの方向性を考えなければ先程俺がしでかしてしまったこととほぼ同じ。世の理に容れられぬという点においては差異を論じられるものではないのだということ。

俺はゆっくりと立ち上がる彼女の姿を見すえつつ、その返答を待た……が、繊美な唇からこぼれたのは更なる謎に満ちた言葉であった。

「知っているはずだ。お前は……自分が何者なのか、そして私が何者なのか」

「分からねえよ」

「分からない？」しかし通じない。即座の否定は更に否定され、俺はどこか怒ったような鋭い眼差しに睨めつけられる。「自分のしていることが分からないと言っても言うのか？」

そして最早斜に構えることをやめたらしい——彼女は真正面からこちらを捉えると、その責めるような口調を更に硬化させてゆく。

「お前はこの世の摂理を——万物の尊厳を、こうして不遜にも犯し続けているではないか」

しかしそれがどのような感情の下に告げられたものであろうとも理解が及ぶか否かは関係がない。俺は思わず気圧され目を背けるのだが、彼女はなおも俺を追い詰めようとしてくる。

「生と死は逆転しない。死と生は対極にあるように見えてその実同じものに過ぎない。つまりは脈波^{パルス}だ。一回性の——それは決して戻らぬ現象なのだ」

「お……おい」

じりじりとにじり寄るようなその歩みに思わず退く……が、止まらない。彼女の足は最早すぐ目の前、目睫^{つじくしよ}の間に迫るも全く緩む気配を見せなくて——まるで初めて遭^あったあの時を繰り返すかのようだ。彼女の記憶の中でそうしたのと同じく俺は、一步、また一步と追い詰められていつて……どすりと何やら背中^{せなか}に硬い感触が当たる。後ろ手に探るとどうやら木の幹に退路を奪われてしまったらしい——俺に、彼女は手のひらを差し伸べてきたと思いきや、それは俺の顔の横を素通りし、背後の木の幹に当てられる。

「不遜は神の領域を犯すことを言うのではない。尊厳とは生命^{いのち}の尊さを言うのではない。それは流れに逆らうことだ。その内にありながらもルールの改変を望むことだ。そして尊厳の蹂躪^{しよく}とは正にそうあろうと望む者にルールを犯せとそそのかすことに他ならない。私たちは万物の存在そのものをそそのかし、死と生との間^{あわい}を無に帰し

ている」

「な……、何を」

「それが分からないというのなら見る。これが私たちの性だ」

言ったその言葉に呼応するように背後から、或いは頭上からである。木々のざわめきを思わせる奇妙な音が聞こえてくる。それを首を捻って横目に見上げた瞬間であった。

思わず目を疑う俺の眼前で、木の枝々が、木質の至極当然硬質なはずのそれらがしかし……曲がる。ぐにやりぐにやりと畝るように、あたかも風に靡く草花の体に揺らめいたと思いきや、更なる異変である。枝が――伸びていた。

さながら須臾の間意志を得たかのように、自由自在に蠢いていて、天へと向かい、陽光の恵みをその手に一手に握らんとでもするかのように伸び広がる……がしかし、そればかりではない。幹から分かれた枝々は、その中間より更なる枝を生やし、その新たな枝がまた更なる枝を生んでと、それは最早植物の常識的生長速度は疎か、この世界の基本的な物理法則さえもことごとく無視してしまっているかのようなだった。余りにでたらめな荒唐無稽な増殖を繰り返していて――、

「死は生の帰結。だが早過ぎる成熟の先に待つのもまた……」死である、それはどこか寂しげな調子の声である。まるで実際の死を悼むかのように告げられていた――その刹那。見上げる視界の中に蠢いていた木の枝々が、内部にわだかまっていた得体の知れないエネルギーに自らの殻を食い破られたかのようなのである。一瞬の内に弾け、葉も樹皮も、等しくその役目を終えてしまったかのようにことごとく散り、或いは無残にも剥がれ落ちていて……いつの間にだろう。元はと言えば取り立てて高いとも低いとも言えなかったはずのその樹木は既に、元の倍近い程の背丈へと生長を遂げてしまっていた。

「世の理を外れた私やお前は这个世界に取って最早毒以外の何物でもないのだ。だから私が咲かせるのもまたお前の生み出すミイラと

同じ」

死の花を、私は咲かせるのだと彼女は言った。

「会ったのか？」

窓から注ぐ夕焼けの色に照らされ、部屋の中は薄いピンク色に染まっていた。

両手に大きなダンボール箱を抱えて、引越先であるこの部屋と向こうの部屋とを既に五往復程はしていただろうか。半ば強制的に課されたその無償労働にいい加減嫌気が差してきた頃である。ついぼそりと彼女のことについて片瀬^{やつ}に尋ねてみると、驚いたような反応が返ってきた。

「ああ、ちょっと散歩してたら偶然な」

壁際のダンボール箱の塔に更にもう一つを積み上げて、振り返りざまにやつがこちらを見る。「で？　どうしたよ。また痛い目でも見たのか？」

「ちげーよ」まるでそうあってくれればと望むかのようなのである。俺は呆れたように返すと、気を取り直して後を続ける。「ただちょっと話をして……でも言ってることが実際めちゃくちゃでさ、彼女――一体何者なんだよ」

「何者……か」何やら曰くありげであるが、どうやら答えに窮しているというわけではないらしい。果たしてしばしの沈黙を挟むとやつは言った。

「お前理事長先生の名前、知ってるか？」

「あ？　ああ」一瞬間食らうも質問自体は至極簡単なものである。俺は昨日会ったばかりの老紳士のあのにこやかな笑顔を思い起こしつつ答える。「確か相園……」

「ユリア」

けれどそれは強かな裏切りである。余りにも予想外の答えに俺は思考を忘れ、現実の時間の流れに取り残されかけるのだが……いや待て、そんなはずはない。

「は？」これでもかというくらいの当惑顔で抗議してやるのだが、何やらやつは察しが悪いとも言いたげである。軽くため息を吐いてから続ける。

「娘だよ……彼女は、理事長先生……相園季一郎のな。血は繋がってないらしいけど。初等部の頃からここだから今は確か二十歳だったか」

何やらにわかには信じ難いことを聞いたようで、一瞬反応が遅れる……が、何だろう。何かが引っ掛かった。

「へえ……」恐らく文脈から推測するに最後のひと言は彼女の年齢のことを言ったような気がしたのだが、だとすれば彼女は俺たちより三つか四つ上級うえということになる——、「って」待て、「何でそうなる」

「何が？」

「だから歳だよ。二十歳はたちって……彼女、この生徒じゃないのか？」

「いや」

「じゃなんで——」

「制服なんか着てるのか……についてはまあ、メルクマールの自己表示ってところか」

「はあ？」

こいつは本当に真面目に答えるつもりがあるのだろうか。思わず盛大に顔を顰しかめて非難がましくも声を上げるのだが、向こうはひどく面倒臭そうである。

「つまりさ、ここには昨日お前も会った真嶋さんとか、学校の先生だとかそういう普通の人たちもたくさんいるわけだ。だからそう……なんていうのかな、制服本来の機能だよ。所属ちようひようの徴表。それを着てるってことはここでは管理する側ではなくて、される側であるっていうこと」

「それだけのために？」わざわざあんな格好をしているのだとしたらそれは余りにも馬鹿正直なことだと思えた。しかしつい年齢の話で制服に目が行ってしまったものの、それ以前に疑問に思わなければ

ばならないことがある。

「つていうか二十歳^{はたち}って……昨日お前が言ってた話じゃそろそろやばい時期なんじゃないのか？」

「だからだろう？」それこそ今の話で解答になるとばかりに言う。

「どうぞ監視して下さいって言ってるのさ。もしその時が来たのならいつでも殺して下さいってな。彼女……もういつでも死ぬ準備はできてるんじゃないのかな」

「そんな……」余りにも救いのない話で、思わず柄にもない声が漏れてしまっていた。

「それに彼女、学校は自主退学しただけで卒業はしてないんだ。だからもしかしたらそのせいもあるのかもしれない」

それで未だに未練があるのだというのなら、それこそやる瀬のない話である。

「でもまあ、いいんじゃないのか？」

「何が――」

思いも掛けず沈鬱な空気になってしまっていたところに、嫌に明るい転調である。

およそそんな樂觀的なセリフが出てきていい場面ではない。俺はつかつとなつて鋭い視線を向けるのだが、迎える表情は何やらニヤニヤと良からぬことを考えている風である。

「確かにまあ、相手を選べとは言いたいところではあるけどさ。それで生きる気力が湧くってんなら仕方ないだろ」

一瞬何のことを言われたのか分からず呆氣に取られる……が、段々とその物言いたげな表情と言葉の真意とが一致してきた。

「お前なあ……」

「その調子なら明日からでも行けそうだな。学校」

「うるせーよ」

多分その余りにも下卑た勘繰りに頭に血が上ってしまっていたのだろう。我ながら平静とはとてもいえないような態度で俺は顔を背けるしかなかった。

たとえば本当にそうだったとしても、それは全然喜ばしいことではない。

翌日、一日遅れの登校初日。

それまでに体験した事が事である。実際色々身構えてしまっていた部分も少なくなかったのだが、いざその新しい学び舎へと足を踏み入れてみると、そこは存外普通の場所であったりして、正直肩透かしを食らってしまった気分だった。

故にどうにも気持ちの緊張を保つことができず、気づけば早昼休みである。俺は手持ち無沙汰に耐えかね教室をあとに、ふと思い立って校舎の裏手から森の中へと伸びる小道を奥へと奥へと進んで来たのだが、しかし――、「何なんだよ。一体」

いい加減に我慢の限界だと、ため息交じりに後ろを振り返る。

「何でついてくんだよ。お前は」

「別に、何となく……散策？」

「じゃねーだろ」呆れた調子に言い返す。「授業中もそうだったよな？　ちらちらと妙な視線を送ってきやがって……お前は、そんなに俺のことが信用できねーのか？」

「別にそういうわけじゃねーよ」

「だったら」いい加減に放っておいてもらいものである。なのに片瀬と来たら、恐らくはこうなることを予め予期していたのだろう。購買で買ってきておいたらしいパンをちびちびと齧りながら小判鮫宜しくひたすら俺のあとを尾けてくるのであった。

強かに睨みすえてやると観念したように肩を竦めて目を逸らす。

「お前はまだ何も分かつちやいないんだ」

「何？」正直かちんときた。分かっている？　この俺が？　昨日のことを棚に上げておいてなんだが、それでも現実を直視できていない懦弱な輩と思われるかと思うと、正直腹綿が煮え繰り返る思いだった。しかし冷静に考えてみればその些か過剰な反応からして、すでにやつと言ったことを一面傍証してしまっているのかもしれない。

れない。

俺はゆっくりとため息を吐くと、どうにかその突発的な怒りを押し殺す。が、どういうわけか、俺に心の動揺を誘うような一言を言った本人がまるで心ここにあらずの体である。ふらふらと夢遊病者のような足取りで歩き出し、一人先へと進んで行ってしまう――その先は、最早目的地である。あのカーネーションの墓園であった。

どうやら見当を付けてやってきた方角は間違いなかったようなのだが、意図せず引き連れてきてしまっていたその道連れは今や自分がどこにいるのかさえよく分かっていない様子である。なおも心ここにあらずの体で、その入り口付近へと足を向けていたのだが……咄嗟に俺はその腕を掴むと体共々引き寄せていた。

「な――」なんだと、皆まで言わさず口に指を当てて黙らせる――や否や、力任せにその体を自分の背後へと下がらせた。

最早この辺りは学校にいる生徒たちの活動圏からは強かに出外れているはずである。にも拘わらず、他には誰もいないようだが二人だけ、墓園の片隅で何やら向かい合って話をしている生徒たちがいた。その様子がどうにも人目を憚るようだったので、つい俺は付近の木の幹の陰へと身を潜めていたのだが……、「おい」後ろからはひどく不満気な声である。俺は取り合わずこちらから質問した。「誰だよ、あれ」

「俺が知るか」

鰐膠もないやつには答えは期待できないらしいが、どうやら男女の二人組みのようである。大方逢い引きの最中なのだろうが、そんなことをするのに何もこんな場所を選ばずともいいだろうに。墓の下で眠る者の身にもなってもらいたい――と、昨日自分がしかしたことなどすっかり棚に上げて内心毒突いていると、何やら話し声が荒くなり始める――その声と遠目に捉えた姿を勘案した結果だろう。「あれ？」さっきは分からぬと言下に否定したはずのやつが今更ながらに呟いていた。

「葛原……あいつ葛原か？」

「なんだ、知ってるのか？」

「知ってるも何もクラスメートだよ。俺たちの」

「クラスメート？」しかし俺には分からない。

「それってどっちだよ。男の方か——」それとも女の方なのかさえである。俺は横目に後ろを振り返りながらそのことを訊こうとしたのだが、正にその瞬間。ぴしゃりという、まるで穏やかな風いだ空気がそのものを打ち叩くかのような音。咄嗟に視線を戻すと少女の手のひらが大きく弧を描き、男の顔が強かに振られていた。

「あらら……」

妙に気の抜けたような声を片瀬が上げるが、それも宜なる哉。自らの頬に手をやり悄然と項垂れる男の姿は確かに哀れのひと言だった。

その姿を少女もそれ以上は見えていたくはなかったのだろう。素早くきびすを返すと墓地の入り口へと足を向けるのだが——、「ってヤバイ」

その様子に慌てたのはむしろ俺よりも片瀬の方だった。木の幹に俺の体を押し付けるようにして自らもまた少女の死角へと逃れようとする——が、「おい、あんまくつつくな」

「仕方ねえだろ」

こうもぴたりと密着されては流石に全身が総毛立つのを抑えられなかった。

「頼むから息を耳に吹き掛けるな」

「静かに」しかしざらざらと決して肌触りのよくはない木の幹へと押し付けられている俺よりも、押し付けているやつの方が断然周囲への注意は利く。是非なく口を噤むより他なかったのだが、その間にもやつの吐息がねっとりと耳元に絡み付いてきて頭がどうにかなりそうだった。そのままの状態で待つこと数秒。

足早の足音が一つと少し遅れて小走りの足音。気忙しげな気配が二つ、近づいてはすぐに遠のいて行く……と、俺は待ち切れずに背後へと伺いを立てた。

「行ったか？」

「ちよっと待てって」しかし更なる猶予が必要らしい。仕方なくなおも忍耐に忍耐を重ねるのだが、「よし、大丈夫……」夫と、皆まで言わず俺は背中をやつの体を撥ね除けていた。

「ったく、冗談じゃない」何で俺がこんな目に遭わなければならぬのだろうか。言うもしかし、向こうの方もそれには同感であったらしい。「こっちのセリフだ」と、何やら恨みがましい目で睨みつけてくるが、どう考えても無理矢理ついてきたこいつの自業自得である。

俺は木の陰から小道へと戻りつつ、視線を墓園とは逆の方向へと向けた。

「それにしてもなんつーか」

「何だよ」

「ずいぶんと緊張感がないんだな」

木立を縫う一本道は行く者の跡を容易に覆い隠す屈曲に富んでいて、今やもう二人の姿は確認することはできない。けれども俺にはまだその姿が目に見えようであった。

「こんな状況でよくそういうことにうつつを抜かせられるもんだ」

「そりゃあまあ……こんな状況だからだよ」

至極当然の疑問を述べたつもりだったのだが、むしろ逆だと言いつ返される。

「俺たちだって普通の学生だ。恋愛すらできない程に壊れてるわけじゃない」まだな……と、それはただの付け足しというふうではなしにやつは言った。

「それよりお前の方こそ一体何の用があってこんなところまで来たんだよ」

「まあ、ちよつとな」

まさか思念透視^{ESP}を使われてはいないだろうが、こいつは彼女とのことをどこか邪推している嫌いがある。少々どきりとしながらもきびすを返すと俺は足を墓地の方へと向けていたのだが、その敷地へ

と足を一步踏み入れたところで既に用は済んでしまっていた。

どうやら昨日のあの白昼夢染みた出来事は、しかし厳然たる事実であつたようだ。

俺はそこに疎らに食とどわれた形跡を留めるカーネーションの群生を足元に眺めつつ、更に奥へと向かう――敷地の対岸である森との境界辺りまでやってくると、徐ろに視線を上へと上げた。そこにはやはり今正に初夏を迎えようとしてするこの時節にはおよそ不釣り合いな寒々しい裸の姿を晒した大樹の姿が聳え立っていて……、

「本当――か」

呟いた声を打ち消すように、それは不吉の予兆か或いは警告か、名も知らぬ鳥が高く木立に鳴き声を木霊させていた。

片瀬の言っていたクラスメートというのが男の方であつたのか女の方であつたのか、その答えは午後の授業開始劈頭に判明していた。「それじゃあこの問題を……葛原くずはらさん、分かりますか？」

「はい」

数学担当にしては多分珍しいに違いない――女性教師の指名に応えて席を立つその姿は正しくそう、あのカーネーションの墓園で見た女子生徒のものである。

どうやら彼女はそこそこの模範生のように、指示された黒板の数式を瞬く間にも解いていってしまう。が、つい先程あんなことがあつたばかりである。それは当たり前といえは当たり前のことではあつたのだが、称賛の声を背に席へと戻ってゆく彼女の表情は決して明るいものではなかった。だからそう――ただの興味本位である。

俺は退屈な授業の望まずにも招くであろう睡魔からの脱却を、彼女の観察を以て果たそうと決めたのだつた。淡々と響く教師の声をBGMに、その背中の中程までも及ぶ長い黒髪を見つめ続けて、一体どれくらいの時間が過ぎただろうか。恐らくは二十分から三十分前後、そろそろ授業の終わりが見えてくる頃である。その異変は他のクラスメートたちの誰の注意にも掛からず、ただ俺にだけ捉えられ

たものようだった。

まるで黒板に打ち付けられるチョークの音の、その無機質なりズムに乗って踊っているかのように見えた。彼女の机の脇に掛けられていた鞆が微かに、しかし何度も、何度も……繰り返すリプレイ映像のように規則正しく揺れていた。

それは初めの内は、年頃の少女らしからぬ無意味な反復運動——貧乏揺すりのせいだろうかとも思っていたのだが、しかしよく見れば違う。彼女の足は折り目正しく左右揃えて床へと下ろされていて、そこには些かの律動も見て取ることはできない。ならば一体何がその不可解な鞆のダンスを引き起こしているのだろうか……と、暈やけた頭に思い巡らせていた時である。よもやと閃く不穏な推理。

まさか——いや、まさかななどと思う方がどうかしている。なぜならここは——この場所は、教師や研究者たちを除けば一人の例外もなくである。異常な人間ばかりを集めた特別な場所なのだから……そう、その時初めて気づいた少女の肩越しに見える手の動き。それは——多分芯が切れたのだろう。何度も、何度も……シャープペンシルの頭をノックするその親指の動きは——同調していた。

子細に見れば一分の狂いや隙もなく、揺れる鞆の動きと正に一体の運動となって繰り返されているその動きは、次第に間を詰め漸次に速く、強くなっている……最早それ以上はないという頂点に差し掛かるうとしていた時だった。静と動とが混じり合い、やがては等しく一連の流れに昇華されて——、「葛原さん？」その頃にはもうすでに壇上の教師も気づいていた。

肩越しに振り返った最前列の生徒がいつにない偏執的な様子でカチカチとシャープペンシルの頭を鳴らしている……ばかりではなく、小声に繰り返す、繰り返す、初めの内は細やかな小声に、しかし次第に声量を上げるとついには最後列の俺の席にまで届いてくるような強い語勢で、どうして、どうしてと、口早にひとり言を唱え続けているのである。流星におかしいと思わないはずがない。

「葛原さん……どうかしたの？」

彼女は慎重な動作でチョークを黒板の受け台へと置くと、ゆっくりとこちらへと向き直る――その瞬間、少女の細やかな手の動きが止まった……と思いきや、眩きもまたいつの間にやら沈黙へと帰していて……、「葛原……さん？」

わずかばかりの不安の色を孕んだ呼び掛けが、再度少女の元へと投げ掛けられた正にその時であった。まるでそれを合図にしたかのように左手から――つまりは教室の窓の方からである。耳を劈く大音声が響いてきて――きらきらと、それはまるで宝石箱を引っ繰り返したかのような光景である。粉々に砕け散った窓ガラスが、太陽の光に煌めきながら窓際の生徒たちの頭上へと容赦なく降り注いでいて――、

「葛原さん！」

ともすれば消え入りそうになる声を無理矢理にでも振り絞ったかのようだった。

或いは少女の注意を自らに引きつけようとでもしたのかもしれない。教壇の上の彼女が叫ぶや否や、我先に、算を乱して出口へと生徒たちが殺到し始める……が、ただ一人、その中でゆっくりと席から立ち上がる少女。その手の中からは粉々になったシャープペンシルの残骸がこぼれ落ちていて……それは強烈な既視感だった。

彼女のその右肩の辺りから異様なボリュームの隆起が膨れ上がると、まるで首を傾げているかのようだった。少女の頭は反対側へと押しやられ、更にはその反対側からでもある。異様の隆起が膨れ上がったと思いきや……いつの間だろう。傍にやって来ていた片瀬が俺の腕を掴んで叫んでいた。

「柴田！ 何してる。逃げるんだよ！」

「逃げる？」

だが俺は彼女から目を離すことができない。

なぜならその肩の隆起は今や畛^{うね}るように腕を伝播して、或いは首筋を伝い、しなやかだったシルエツトを伝わり落ちていて……腕が、首筋が、背中が脚が、全て一昨日見せられたあの映像と同じである。

最早ヒトのそれとは捉えられぬ程にも醜いありさまに成り果てしまっていたのである。制服は疎か、皮膚さえもがそう、内から膨れ上がる筋肉の膨隆によってずたずたに引き裂かれてもいるのだ。なのに一体――、「何から？」やつは逃げろと言うのだろうか。

俺はひどく難解な問題を突き付けられでもしたかのように懊悩しつつ、ようやくのようにやつを振り返る――と、唐突に鳴る、ベルの音。

火災報知器のような、しかしそれとは少しく毛色の違うような音が鳴り響いていて、俺は当然のように再び視線を教壇の上へと戻すと、そこには今や蛇に睨まれた蝦という体で、全身を細かく震わせつつも、しかし教卓の上に両手を突いて真正面から化け物と対峙して已まない女性教師の姿があつて……恐らくはそうだろう。他のクラス生徒たちにも危機を知らせる警鐘であつたに違いない――そのベルは、我が身を囫へと捧げたその女性教師が鳴らしたものだ。たのだ。なのに多分、彼女自身は腰が抜けてしまったのだろう。そこから一步も動くことはできずにいて……でもそれも無理からぬことだと思う。だってあれはそう――真正銘のバケモノなのだから……。

「柴田！ 早くしろ！」

ついには痺れを切らしたのか、両手で俺の肩を掴むと強引に揺さ振ってくる。が、その声に応じたのは俺ではない――あのバケモノである。

今やもうバケモノとしか呼びようのない、けれどもつい先程までは可憐な少女であつたはずのものが、首を後ろに、瞳を横に、片方に二つある目をゆっくりとこちらへと向けていて――慟哭える。その口元が、震える喉が、見開かれた異様の目が――或いは俺をようやくのように現実へと引き戻していたのかもしれない。

「柴田！」

片瀬の呼び掛けと共ににわかに現実感が込み上げてくる――が、もう遅い。その時にすでに周囲の空気は微細な震動を孕み、耳はあ

のハウリングのような独特の音を聴いてしまっているのである。果たして刹那の^{のち}後には遙か後方——教室の背面にあるロッカーへと俺たちは強かに叩きつけられてしまっていた。

激しい衝撃と共に苦悶の呻きがこぼれるが、意識だけはどうか失わずに済んだらしい。どうやら無意識の内にもPKを背後へと放っていたらしく、背中に感じるロッカーの損壊具合から予想される程のダメージは体の方にはなかった。が、もう一人の被害者、片瀬の方は言えばそう上手はいかなかったようである。見ればうつぶせに倒れていてぴくりとも動かない。

「ちくしょう……」

俺は背中の痛みに耐えつつどうにかその場に立ち上がると、その今やすっかりと標的をこちらへと切り替えてしまっていたバケモノと睨み合う。

どうやら先程まで今の俺と同じようにしていた女性教師^{かのじょ}は、張り詰めさせていた緊張の糸を切らしてしまったらしい。視線をわずかに下げると案の定、教卓の陰からは投げ出された脚だけが見えた。恐らくは気絶してしまったのだろう……故に、今やその四つの瞳が捉えるのはこの場で唯一意識を残している人間——俺だけである。

だからそれは当然の帰結。徐ろに、そしてどこか厳かにでもあった。屈する膝は重心を低く、床へとひざまずくように小さく巨体を折り畳むと、引き絞る——筋肉の節々からは迸る力の蓄積が有り有りと見て取れた。それは当然今しも比類なき推進力として解き放たれる時を待つばかりであり——、「くそ！」

最早力を出し惜しみするなどということは不可能だった。

俺は筋力と言わずPKと言わず、全身全霊の力を総動員するとその場から飛び退く——と、正に紙一重、刹那の^{のち}後には背後から、まるで恐竜の雄叫びのような得も言われぬ激しい音が轟いてきていて……最早見るまでもない。そこには元通りのロッカーの姿などありはしないであろうことが窺えた——そのさまを、俺は一刻も早く確認しようと床へと転がりざまに背後へと素早く視線を放っていたの

だが、しかし……なぜだろう。

最早廃墟としか言い様のない教室の一面に——いたはずなのである。あのバケモノは——しかしいない。代わりにすぐ隣から、獣の唸り声のようなものが聴こえてきていて……ゆっくりと、ぎこちない動作でそちらを振り向いた俺の視界の中に捉えられたのはやはりそう——絶望の権化。手を伸ばせば容易に触れられるような距離から俺を見下ろしていた——あのバケモノの姿である。

俺はもう殆ど真っ白に塗りつぶされてしまっていた頭の中で、それでも何とか思考を巡らせようと試みる。

こいつ——このバケモノは、聞くとところによれば人を襲うのだという。

けれどもそれは一体何のためだ？ まさか……食べるつもりじゃないだろうな……と、それは余りにも短絡的な思考である。けれども否定し切る根拠も今の俺にはない——憶測に、俺は自分でも信じられないような奇妙な叫び声を上げていた。

そして体は自然と後ろへ、床へと尻餅を搗いたままの状態でひたすらに後ずさって行くのだけれど……でも、運命は行き止まる。ちようどそれは俺がこの場所へと導かれたように……硬い背中の感触は、最早俺には逃げ場など一ミリも残されてはいないことを論し掛けている。

「嫌だ……」しかし言う。冗談じゃないと、俺は首を横に振りつつ訴える。

「何で……」背中をロッカーへと押しつけながら、誰へと向けたのかも知れない問い掛けをこぼす。

けれどももちろんそんな俺の疑問に答えてくれる者などどこにいはずもなく……ゆらり、やつはその巨体を持て余すかのような茫漠とした足取りでこちらへと近づいてくると、あたかも獲物の良し悪しを吟味するかのような仕種でひたと寄せてくる——その醜怪極まりない顔貌は、しかし最早人間のそれとは見ることは能わず、体の巨大化に比して質量的変化に乏しかった頭部もけれど、全くと

っていい程何の慰めにもなっていなかった。

なぜなら筋骨隆々たる体軀にその頭部はあまりにも小さくアンバランスであり、不自然であり、不気味であり……少女のつい先程までは愛らしかったはずの口元は、今や口端から覗いた獣牙きばによって獣のそれと見紛うばかりに醜く裂けてしまっているのである。

そればかりか、最早二つではなく四つよっとなってしまうているのだから両の目と言うには些か無理があるかもしれない——この地球上を広く見渡してみたところでその類るいはないであろうと思われる異形いぎようの瞳である。それはあたかもその奥に宿るであろう意思そのものの分裂をも意味しているかのように見えて……、「嫌だ」胸の底から湧き起こってくる恐怖を必死に紛らわせるように——、

「嫌だ、嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ——」

俺は何度も、何度も、せわしくつぶやきながら首を横に振り続けるのだけれど、でも腕は、バケモノやつのその熊の腕程もあろうかと思われる巨腕はしかし、すでにもう遥かな頭上。こちらの愁訴哀願などお構いなしとばかりに天高く振り上げられていて……爪が、見れば獲物を切り裂く鋭さをいつの間にやら獲得していた。それはもちろん今しもこの俺の元へと容赦なく叩き付けられることは必至であり……白く、一色に塗りつぶされる——理性が恐怖に駆逐され、目裏うらに、己が死の閃影せんえいを思い見ていた俺の耳に、それはもうずいぶんと久し振りに聞くかのような声である。

「そこまでだ」

凜然たる口調に一分の隙さえ窺わせずと言う——そんなようなセリフが耳に響いてきたと思いきや、見上げる視線の先にはそう……彼女。

その細くしなやかな体を屹然と押し立てて、真一文字に突き伸ばした手のひらをぴたりとバケモノやつの側頭部あたまたまへと当てている——その少女、相園ユリアは、恐らく人語は解さぬであろうバケモノにそれでも制止の言葉を投げ掛けるや否や、なぜだろう……本当に止めてしまっていた。

「悔いはあるだろう。思い切れぬ思いも一つではあるまい。けれどももうお前は手遅れだ。だから……」と、更には囁くような、それでいてよく徹る声で続きを述べたかと思いきや、しかし沈黙。けれどもすぐにも息を吹き返し、正にそう——それはきつと彼女自身も認めているに違いないのである、その通称。或いは蔑称。それとしての二つ名——「死神^{しにがみ}」。正にそれにこそ相応しい冷淡な口調で告げていた。

「さよならだ」

それが合図である。

弾かれたようにバケモノ^{やつ}は腰を屈めたままの状態で腕だけを横様に、振り下ろすのではなく、薙ぎ払う軌跡に解き放つ——行く先は、もちろん俺ではなく彼女。その華奢な体躯である。けれども何ゆえにか巨人のその渾身の一撃は細く頼りなげな彼女の左腕一つで軽々と受け止められてしまっていて……ぴたり、止まる。その直後。

眼前に聳える巨体があの時……カーネーションの墓園で見せられた異常^{もの}と同じようである。それは内から溢れ出す何物^{もの}かによって急速に身を綻ばせ、天へと向かい、咲く準備を整えて……最
早俺はなぜ自分が哀れがましくも嗚咽を漏らし、果ては狂ったかのように喚き散らしているのかさえ分からなかった。

けれども紅い——血の雨は降り、花は咲く。

故に脳裏にはあの時彼女の語ったことがまざまざと思い起こさ
れて……ああと悟る。俺の目の前にはそう、名の由来を知ってい
たならば宛然^{えんぜん}それを思わせただろう——肉色^{カーネーション}の花。それに擬^ぎされて
違和はない。かつての人間^{ひと}たる先の異形。けれども今やそのどちら
でもない……裂^ひけて咲く、人体^{にく}の徒花^{はな}。

咲いてはならない体を裂いて、終わりへと果てた〈死の花〉の姿
が聳え立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9872x/>

OHMA - 逢魔 -

2011年10月29日03時21分発行